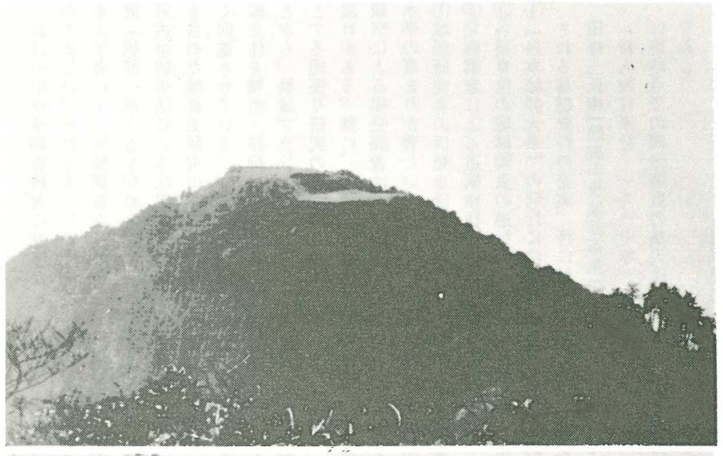
北九州市の文化財を守る会

会　報

№ 61　62.10.15

発行　北九州市の文化財を守る会
北九州市小倉北区鍛冶町一丁目7—2
森鷗外旧居内
電話（093）531—1604

印刷　博文堂印刷所
北九州市小倉北区長浜町2—22
電話（093）511—1011



花尾城遠景

夏草繁る本丸跡

花尾城を史跡指定に
＝中世遺構の集大成＝

平木盛二朗

曽て八幡で、「麻生」をやると云ったら馬鹿か狂人（きちがい）と云われる程、難解とされた。花尾城の麻生の歴史を科学的にひもといたのは竹中岩夫氏である。帆柱自然公園全体を把えて「ふるさとの歴史の証人」と云うのは門司宣里氏。北九州市は、自然公園を造るためにブルドーザーで花尾城を整地して了った。昭和四十五年十月の事。その結果、多数の陶磁器片と炭化米・鉄釘・鉄滓を採集するを得たのは、全く皮肉としか云い様がない。

鉄釘・鉄滓の分析は大沢正巳氏、陶磁器片の考古学的知見は鴻江敏雄・谷口俊治の両氏。又遺構の確認を行ったのは木村幸雄・中村修身の両氏である。

福岡県下、九百六十にも及ぶ古城址を究めた広崎篤夫氏は、「花尾城には山城の遺構が集大成され…中世山城の典型。」と激賞する。

山城の構成要件は、空堀・土塁曲輪の三点セットにある。南北朝初期の簡単な山頂削平から次第に連郭へと移り、腰曲輪・馬出し・桝形・虎口等を生み出した。

山城の目的は防禦にある。限りある少数の人数で最大の防備を図る苦心の傑作が竪堀であった。竪堀の効用が認められて、戦国中期以降、連続竪堀の畝状阻塞が発明された。かくて縄張りは精緻を極めてくる。次頁長野城の縄張り図に見る通りである。

花尾城も、数度の修築を経て防衛合理化を続け、今見る縄張りに至ったと類推して間違いない。

（八幡東支部長）

カマボコ状穴は小舟、中央部炉床

写真4　金山たたら（犬鳴）高殿炉下施設

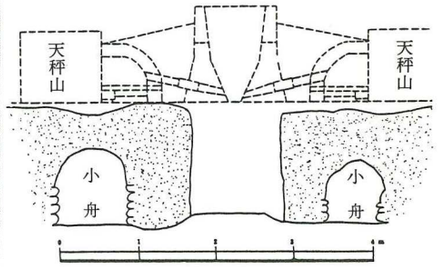


図3　真名子鉄山たたら側面復原図

北九州郷土史研究会編
『真名子鉄山発掘調査報告書』1969

たら製鉄法で還元された鋤や銑の関係は紙数が足らず別途述べる予定である。（図3・写真4参照）

六、まとめ

北九州市内の古代製鉄の歴史をひもどいてみると、古い時代までも遡る。列島内の砂鉄製錬の開始時期は、五世紀後半代と考えているが、この時期に相当する鉄滓が、小倉南区の潤崎遺跡の祭祀土壌から検出された。続いて古代では、官営の可能性の強い丸ヶ谷遺跡（八幡西区）で、長方形箱型製鉄炉と補助燃焼孔（横口）つき炭窯がセットで存在した。また中世の鍛冶を証明する鍛冶滓が集落や山城から出土する。近世になると、黒田藩営のたたら製鉄場といった技術が綿々と続く。これらが、鉄の都といわれた八幡製鉄所の基盤となっているのをみるとひとしお感慨深いものがある。

わが国では昭和25年に、「国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的」として、文化財保護法が制定されました。北九州市でも、市内に所在する貴重な文化遺産の保存と活用を図るために、昭和45年文化財保護条例を制定し、今日までに48件の文化財を指定しました。このほかに国指定文化財は5件、県指定文化財は44件を数え、指定文化財総数は97件に達しています。

北九州市では、文化財指定の都度その資料を公表していますが、公開の機にめぐまれない資料も少なくありません。そこで、できるだけ多くの文化財を展示して、当市文化財の現況をご理解いただきたく存じております。また市民各位には、文化財保護に対する一層のご協力とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

展示品・会期・観覧料等については同封のチラシをご覧ください。

講演会

演題　九州の彫刻
講師　九州歴史資料館
　　学芸員　八尋和泉氏
日時　昭和62年10月24日（土）
　　午後二時より
場所　北九州市立視聴覚センター研修室

昭和62年度 わが町の宝 北九州市の指定文化財展
北九州市立歴史博物館

昭和62年度
文化財保護強調月間行事
（11／1～7）
氷照寺の輪蔵
歴史博物館特別展　}見学

対象　市民
定員　各50人
参加料　300円
日時　11月5日（木）　6日（金）
　　7日（土）の3日間
　　時間はいずれも午後1時
集合場所　小倉北区鍛冶町一丁目7—2
　　森鷗外旧居
内容　城下町図を手にして、江戸時代の小倉の町並みと永照寺の輪蔵を探ね、そのあと特別展「北九州市の指定文化財展」を見学する
申込み　電話で申込み、定員で締切
問合せ先　教育委員会社会教育部文化課
　　電話 582—2389

事務局だより

▽会報第六十一号をお届けします。今回は八幡東支部担当です。平木支部長さんお疲れでした。次号は若松支部にお願いします。

▽北九州市立歴史博物館での「北九州市の指定文化財展」については本年度の行事の一つにあげておりますので、会員の方に観覧券を配付いたします。是非ご利用ください。

▽十一月下旬実施予定のバスによる文化財めぐりは都合により中止いたします。

日本最大級の畝状阻塞（連続竪ぼり）を発見

＝豊前国企救郡長野城＝

広崎篤夫

一、はじめに

最近の中世城郭史研究の進展はめざましい。それは主として歴史考古学者による発掘調査からの研究（越前一乗ヶ谷を初めとして、考古学的手法による成果は、居館を含めた城郭史研究の水準を大きく前進させている。）、他方、山城全体を精密・詳細に踏査することから、築城プランを読みとろうとする縄張り研究の方法の二つの流れがある。殊に、後者、地表面観察による縄張調査は、全国的に水準の高まりが著しい。これは、

①城郭研究者の活発な活動
②発掘調査による遺構確認の増加
③各県単位の城跡調査の進行
④『日本城郭大系』の刊行に代表される基礎資料の充実、特に村田修三氏編『図説中世城郭事典』（新人物往来社・一九八七年）は現時点での縄張調査の集大成である。
⑤考古学者、城郭研究者共同の研究発表の場であり、四回目をむかえた「全国城郭研究者セミナー」の実現によって、視野の広い多様な研究が可能になり、その成果は集約的機能を果たしている。

私は、第三回セミナー（一九八六年八月二日～三日、神戸市）に「福岡県の畝状竪濠」と題する報告を依頼されて参加した。福岡県内に約九百六十の古城址がある。このうち畝状竪濠のある山城址は四十三例を数え、新潟県の七十例につぎ全国二位となっている。

畝状竪濠は戦国期に使用されたと考えられる。戦国期に入ると堀が発達し多様化する。単なる堀切でなく、帯曲輪、武者屯となり、斜面を下る竪濠となる。そして、戦国期の中頃から後半にかけて、北海道、沖縄を除くほぼ全国に出現してくるのが畝状空堀群である。曲輪周辺の緩斜面処理を果たしたものと考えられる。基本的には堀を等高線と直角の方向に並べ築いた山腹の密集空堀群のことである。第三回セミナーで、私は、長野城（小倉南区）を中心に報告させていただいた。長野城には、百二十七条の畝状竪濠があり、実に、日本最大の規模ではないかと注目された。

そこで、本稿は長野城の歴史、遺構についてのべて見たいと思う。

二、長野城の現状と歴史

所在地　北九州市小倉南区長野

遺構　櫓台、土塁、畝状竪濠、桝型虎口、土橋、空堀

長野城は、長野集落の南、通称城山と称する長野山（二三〇m）の山頂に位置している。平安時代の末期、豊前の国司として下向した長野氏（本姓平氏）が鎌倉・室町・戦国時代と四三〇年の長い間、豊前国企救郡（現小倉北・南区）を中心に支城二〇余をかまえ、、勢力をほこった本城の跡である。

城山山頂の郭Ⅰが本郭で、七六m×六〇mの広さをもち、郭の中心部に八m×六mの近世城郭の天守台に相当する櫓台Aが現存する。Ⅰの郭の西に、土塁に囲まれた郭Bがあり、枡形門の原形を思わせる遺構である。Ⅰの郭より北に階段状に郭が続きⅡの郭に達する。Ⅰ・Ⅱの郭の西側は帯曲輪、東側には土塁が築かれている。なお、ⅠとⅡの郭の間は空堀で区画され土橋遺構が現存する。Ⅱの北に二の丸ともいうべきⅢの郭がある。二〇m×一三mの長方形台地で西端に九m×七m、高さ五mの櫓台があり、櫓台から連続して南縁に高さ二mの土塁がある。本郭ⅠとⅢの郭は、あきらかに一城別郭のかまえである。

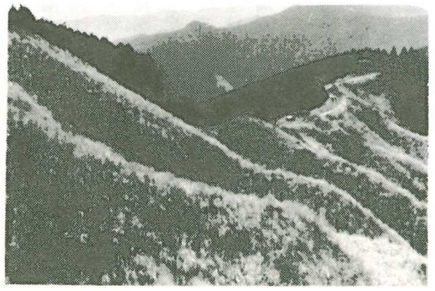
Ⅲの郭の周囲は空堀がめぐり、空堀の縁から切り落す様に山腹にかけて五一条の竪濠があり防御性を高めている。特に東の竪濠が枝状に分かれて造られ、他に例のない特異なものである。

Ⅰから Ⅲに至る各郭の東側から南側にかけて空堀がとりまき、空堀から山腹にかけて七三条の竪濠が城台をとりまくように構築されている。（本城で一二七条を確認）北西にも九つの階段状の郭をもつ出丸Ⅳが現存。

以上の概略から、この城は平安末期築城の古い城郭であるが、遺構をみると複雑な縄張をもつ戦国末期の大規模な山城であったことがわかる。

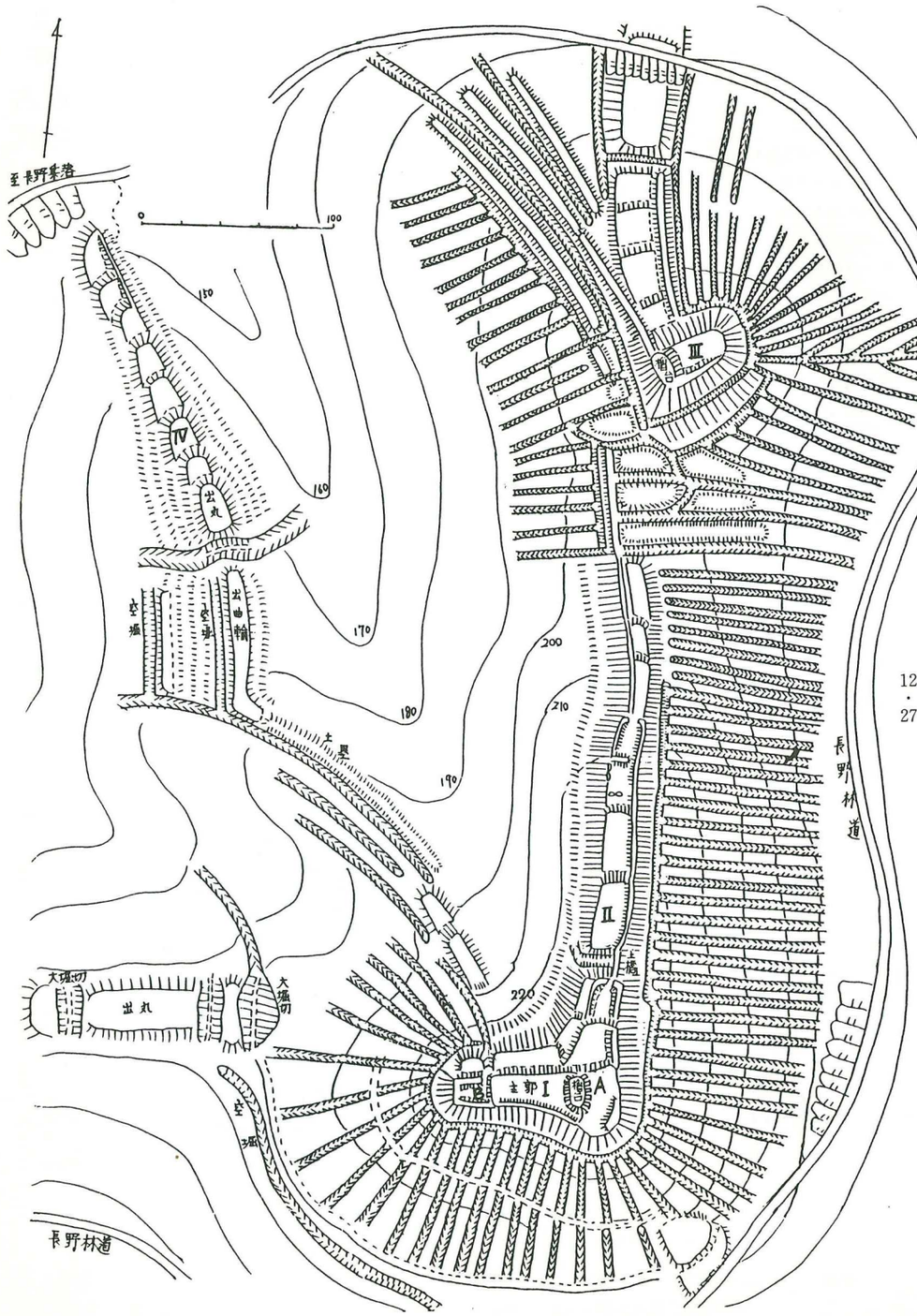
三、おわりに

わが北九州市に、全国に比類のない貴重な遺跡が存在する事は我々市民の大きなほこりである。しかし、現実には、林道開さくにより城址は一部破壊され、雑木にうずもれて忘れ去られ様としている。市民の皆様の御理解をいただき、是非とも史跡指定を願って脱稿した所以である。



畝状竪ぼり
―畝の如き連続の竪ぼり

長野城の縄張り



長野城＝北九州市小倉南区長野
1986・1・12
12・26 調査　廣崎作図
12・27

北九州古代近世の製鉄（その二）

大澤正己

第52号（60・8・1）で一、弥生時代の鉄器と鍛冶、二、古墳時代の鉄生産、に触れた。本稿では古代、中世、近世について述べる事にする。

表1　文献から推定した古代における鉄の生産地

年代	文献	岡山 美作	岡山 備中	岡山 備前	広島 備後	兵庫 播磨	島根 出雲	鳥取 伯耆	滋賀 近江	茨城 常陸	石川 能登	福岡 筑前
8世紀以前	続日本紀巻3								○			
	続日本紀巻10	○										
	播磨国風土記					○						
	出雲国風土記						○					
	常陸国風土記									○		
	大日本古文書5巻4頁	○										
8世紀中葉	平城宮出土木簡			○								
	平城宮出土木簡				○							
9世紀初頭	日本霊異記下巻13	○										
	日本後紀巻13				○							
	類聚三代格巻8				○							
10世紀前半	延喜式巻24主計上	○	○		○			○				○
	政事要略巻第53		○		○			○				
12世紀	今昔物語巻14・第9	○										
	今昔物語巻26・第15										○	

三、古代の製鉄

(一) 文献からみた古代産出国

京域出土木簡や文献に表われる鉄の貢進国は十一ヶ国におよぶ。筑前国は、十世紀代の『延喜式』に鉄・鍬の産出国として記載されている。（表1参照）

北部九州は、福岡平野を中心として、高品質砂鉄、豊富な木炭、良質炉材粘土の賦存地帯であり、古墳時代から律令体制下の古代へかけての砂鉄製錬操業が盛行した地域であった。

(二) 古代の製鉄遺跡

近年、古代の製鉄遺構が炭窯とセットとなって、全国的な拡がりのなかで検出されている。北九州市内では、八幡西区永犬丸所在の丸ヶ谷遺跡が著名な遺跡として挙げられる。製鉄炉は、長方形箱型炉に分類される。製鉄炉は、砂岩質岩盤に炉床部を設け、両端に排滓ピットを付帯する。プランとしてはひさご形を呈している。（写真1参照）

また、炭窯は白炭、黒炭の両方が焼成できる補助燃焼孔（横口）をもつタイプである。（写真2参照）この種の炭窯は太宰府市所在池田遺跡で初検出されて八ツ目うなぎ窯の俗称で用途が問われていた。

丸ヶ谷タイプの製鉄炉は、北部九州では新幹線車輌基地で発見された春日市所在の門田遺跡、糸島半島の志摩町の八熊遺跡らで検出されている。いずれも製鉄原料は砂鉄であった。なお他地域では滋賀県野路小野山遺跡で検出されており、こちらは鉱石製錬として注目される。以上丸ヶ谷タイプの製鉄炉と炭窯のセットを有する遺跡は官衙施設に付帯する可能性の強いことを指摘しておく。

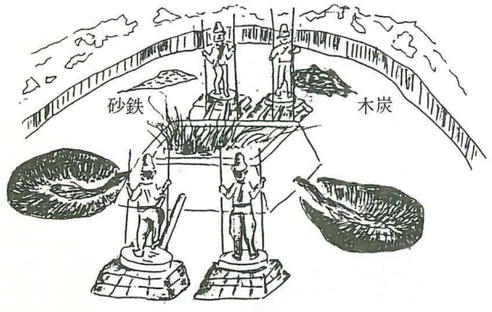
一方、列島内の製鉄の技術系譜として前述した箱型炉に対して、半地下式竪型炉が存在する。傾斜面に先のすぼまる円筒状もしくは方柱状の炉体をはめ込んで構築される。福岡平野でも、それらしき遺構はあるが、炉姿の確認は熊本県の西原遺跡にまたねばならぬ。（図1参照）

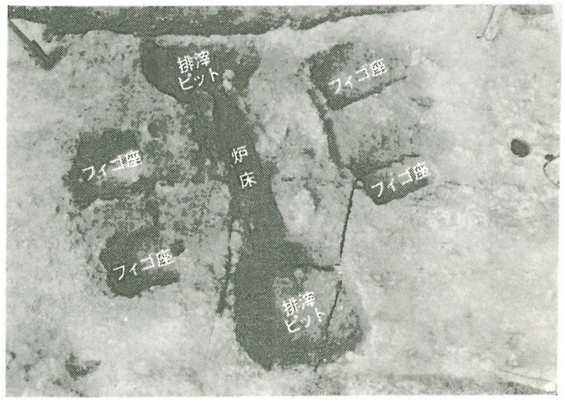
律令体制下では、各種金属の国家的需要を満たす為、辺境の地まで官人工の派遣がなされ開発が進められている。竪炉の点在個所を俘因移配地としてとらえるむきもある。表2には列島内の古代製鉄炉の代表例を挙げておく。

四、中世の製鉄

(一) 史料にみられる鉄製品

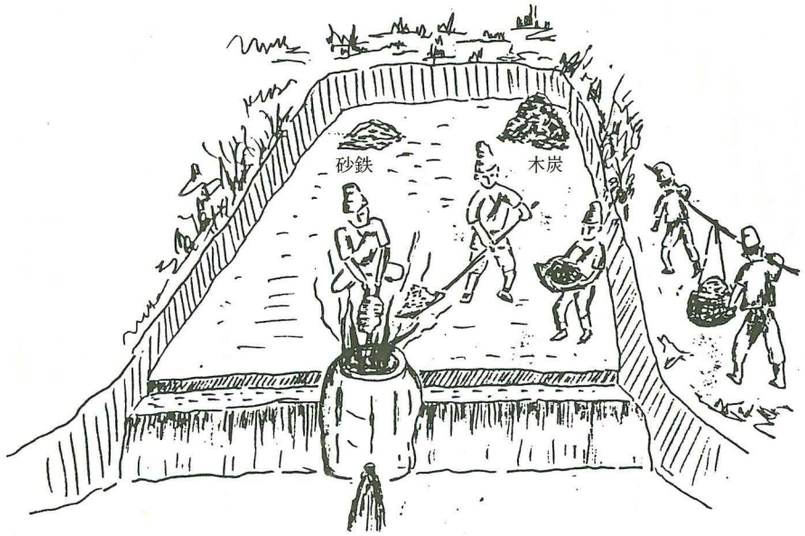
製鉄研究史においても中世は空白地帯である。製鉄遺構も全国的にみると、古代に比べてその検出





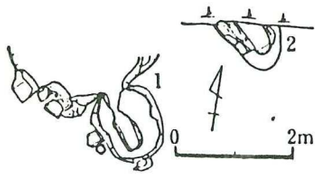
軟砂岩に全長2m、幅30cm、深さ15cmの溝を設け、中央85cmを粘土で仕切って中に粉炭を敷き込み防湿設備とする。排滓ピットは1.3m、深さ30cm、フイゴ座60×60cm、深さ20～30cm

写真1　長方形箱型炉（丸ヶ谷遺跡：八幡西区永犬丸）製鉄炉地下設備
（写真提供：北九州郷土史研究会）

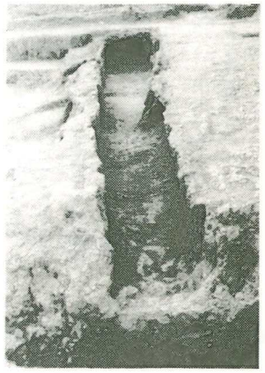


半地下式竪型炉の操業想定図

図1　半地下式竪型炉
（熊本県西原遺跡）古代



西原製鉄遺跡



全長7.8m、幅53～80cm、深さ60cm
左側に補助燃焼孔4ケが設けられている。

写真2
補助燃焼孔（横口）付炭窯
（八幡西区丸ヶ谷遺跡）

区分	箱形炉（Ⅰ）	竪形炉（Ⅱ）	富山県内の炉	自立円形炉（Ⅲ）
A・D年 600	戸の丸山〔広島〕 大蔵池南（a）〔岡山〕 古橋〔滋賀〕 緑山（a）〔岡山〕			
700	向田E（b）〔福島〕 野路小野山〔滋賀〕 藤原（a）〔岡山〕 キナザコ（a）〔岡山〕 八熊（b）〔福岡〕	富士見台Ⅱ〔千葉〕 中ノ坪Ⅱ（a）〔千葉〕	南太閤山Ⅱ1号（Ⅰ－b） 囲山東（Ⅰ－b） 東山Ⅰ（Ⅰ－b）	
800	石生天皇（a）〔岡山〕 向田F（a）〔福島〕	真木山（a）〔新潟〕 大山（a）〔埼玉〕 金井（a）〔群馬〕 花前（a）〔千葉〕	安田（Ⅰ－b） 石太郎C（Ⅰ－b） 小杉丸山（Ⅰ－b） 椎土（Ⅰ－b）	
900	門田（b）〔福岡〕	坂の上E〔秋田〕 菅ノ沢（a）〔群馬〕	南太閤山Ⅱ2号（Ⅱ－a）	
1000	丸ヶ谷（a）〔福岡〕	台耕地〔埼玉〕 猿貝北〔埼玉〕 伊勢崎東（a）〔群馬〕	上野赤坂A1～3号（Ⅱ～a）	日野〔静岡〕 日詰O地点〔静岡〕 西浦北〔埼玉〕
1100	大矢（b）〔広島〕	西原（b）〔熊本〕		

長方形箱形炉……Ⅰ　地下構造をもつもの……（a）　（　）内記号は型式
　　地下構造をもたないもの……（b）
半地下式竪形炉……Ⅱ　円形炉床をもつもの……（a）
　　火床炉・極端にせばまるもの…（b）

表2　製鉄炉の年代的位置　穴澤義功「鉄生産の発展とその系譜」『日本歴史地図』原始・古代編下柏書房1982年をもとに関清〔1984〕が該表作成。これに一部筆者加筆。

例は減少し、北部九州でも、その例にたがわない。そこで鉄の用途を古代と近世の史料によって探ってみた。

まず、古代（九三四年）の百科辞典とも云える源順著の『倭名類聚集』の鉄金物の項目を次に記す。

壁具―戸の引手、錠、かぎ等。舟具―いかり。車具―てしき、くさび。金類―金、銀、銅、鉛、錫水銀。僧坊具―かみそり。征戦具―甲冑、楯、刀剣、まさかり、ほこ。容飾具―はさみ。裁縫具―はさみ、針、火のし。漁釣具―つり針。農耕具―すき、くわ、熊手、鎌。造作具―釘。工匠具―まさかり、斧、てうな、やり鉋、鋸、たがね、鉄槌、曲尺、彫刻刀、錐、のみ。鍛冶具―ふいご、踏ふいご鋳型。金箸、金床、銅鉄を切るはさみ、やすり、たがね、砥石（粗砥、仕上砥、青砥）。金器類―鍋、釜、茶釜等。

次に『和名類聚抄』が刊行されて隔てること約八百年後の一七一三年に発行された寺島良安著『和漢三才図会』の「諸国産金物」として地域別の産物が挙げられている。

播磨国―鉄鋼、鍬、鋤（何れも宍粟）、鏡、鍋。備中国―鉄。伯耆国―鉄鋼。出雲国―鉄鋼。山城国―針（京三条）、釜鑵子、砥石（鳴滝）。摂津国―策鉄（ふちがね、針を作る地鉄、大阪）、鍋釜（道頓堀）、いかり。河内国―くつわ（誉田）、金剛砂（金剛山のふもとに出ず）。和泉国―鉄砲、庖丁（何れも堺）。紀伊国―砥石（神子の浜）。丹後国―やじり（浮守村にて製す）。但馬国―砥石（諸磯）、白銀。石見国―銀、錫、鉛。豊後国―錫、鉛。筑前国―釜（遠賀郡芦屋）。肥後国―煙管（熊本）、砥石（天草）。大隅国―鉄砲（種子島）。肥前国―賤刀（やすがたな、多く造りて奈良に送る、世に奈良物と称す）、鉄砲（有馬）、時計細工、外科道具（以上長崎）。壱岐―青砥石、鉛。越前国―鉛、砥石（常慶村）、毛抜、くつわ。美濃国―小刀（関）、かみそり、庖丁。近江国―砥石（高島）、鉄砲（甲賀）、やじり、煙管（以上水口）、鍋釜（辻村）、針（大津）

以上新たに加わった鉄製品は、鉄砲一点のみである。鉄鋼技術史上での鉄砲の登場は大きなテーマであり、この問題は他日にゆずるとして、ここでは北部九州関連の事項に眼を移す。

筑前国―釜、有名な芦屋釜である。しかし、現在のところ芦屋釜の鋳造を裏付ける遺構及び鋳造滓の検出はなく、その生産実態は不明のまま依然として謎のベールに包まれている。（芦屋地区における鍛冶滓の出土は数ヶ所、製錬滓一ヶ所は確認済み）

表3　北九州市内における製鉄遺跡の性格分類

鉄滓出土遺跡	祭祀遺跡	潤崎遺跡（小倉南区）	古墳時代中期（５Ｃ後半・流出滓、精錬鍛冶滓
		上清水２号墳（小倉南区）	古墳時代後半（６Ｃ末）…鍛錬鍛冶滓
	製錬遺跡	丸ヶ谷遺跡（八幡西区）	奈良～平安？……流出滓、炉内残留滓
		真名子鉄山（八幡西区）	近　　世……流出滓、炉内残留滓
	精錬鍛冶遺跡（大鍛冶）	長野Ａ遺跡（小倉南区）	古墳時代中・後期……椀形鍛冶滓（５Ｃ前半～６Ｃ末）
		馬場山遺跡（八幡西区）	中　　世……椀形鍛冶滓、鍛冶滓
		白岩遺跡（八幡西区）	中　　世……鍛冶滓
	鍛錬鍛冶遺跡（小鍛冶）	長野Ａ遺跡（小倉南区）	古墳時代中・後期……椀形鍛冶滓、鍛冶滓
		花尾城址（八幡西区）	中　　世……椀形鍛冶滓、鍛冶滓
		本　　城（八幡西区）	中　　世……鍛冶滓
		（竹尾城址）（八幡西区）	中　　世……鍛冶滓
		馬場山遺跡（八幡西区）	中　　世……椀形鍛冶滓
		辻田遺跡（八幡西区）	中　　世……椀形鍛冶滓、鍛冶滓、小鉄塊
		茶屋原遺跡（八幡西区）	中　　世……鍛冶滓
		白岩遺跡（八幡西区）	中　　世……鍛冶滓
		新道寺天疫神社前遺跡（小倉南区）	中世（13Ｃ中～後期）……鍛冶滓
		宮谷遺跡（八幡西区）	奈良～平安……鍛冶滓
	鋳造遺跡	小倉城内遺跡	近　　世？……鋳物滓

(二) 北九州市内の製鉄関連遺跡

中世の鉄生産の実態は不鮮明である。中世以降は一定地域で鉄製錬から鉄器製作までの一貫作業は少ないと考えられる。すなわち、鉄製錬は限定された地域に集約化され、鉄素材はそこから多方面に流通され、自給的に鍛冶加工がなされた兆候が伺われる。

表3に示す様に、北九州市内の十五製鉄関連遺跡のうち、八遺跡が中世に属す。この八遺跡は集落内の住居跡や山城から出土した鉄滓で、いずれも鍛冶滓に分類される。これら鉄滓は、前述した『和名類聚抄』や『和漢三才図会』に示した日常用具（農工具）や武具の類の鉄器製作の痕跡で、鉄還元の製錬は認められない。（図2参照）

写真3に鉄滓の鉱物組成を示す。潤崎遺跡出土の五世紀後半代の製錬滓は、ウルボスピネルやイルミナイトを、また近世たたらの真名子鉄山の製錬滓は、マグネタイトを晶出する。副葬鉄滓として北九州初出土例で6世紀後半代の上清水2号墳の供献鉄滓、及び中世山城の本城出土の鉄滓らは鍛冶滓でヴスタイト十フェアライトは鍛冶滓特有の晶癖を呈している。

鎌鍛冶図『筑前名所図会』

図2　鍛冶屋風俗

五、近世の製鉄

日本の製鉄法も古代・中世から近世になると長足の進歩をとげる。山陰地方で操業された有名なたたら製鉄法である。

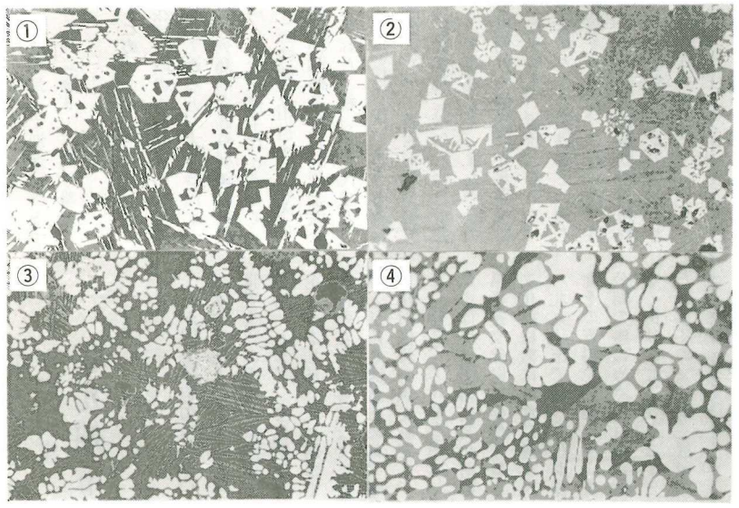
たたら場は、製鉄炉、材料置場、職人控所らを一ヶ所に納めた高殿と称する建屋を設けている。製鉄炉は、大がかりな防湿設備をもっている。炉下施設として掘り方は約3米×8米、深さ2米前後の竪穴を掘り込み（床釣り）、レキ、真砂土、炭などを敷き詰めた上にカマボコ形の空洞三本（中央本床、両端小舟）を構築する。この空洞を2～3ヶ月焼き上げて乾燥させ、中央の本床の天井を壊して中に灰、炭などを詰めた上に炉を築く。炉体は、長さ二四〇センチ前後×幅九〇センチ前後、高さ一二〇センチ前後の箱型で、砂鉄、木炭を交互に装入し、天秤フイゴで送風しながら三日三晩操業を続ける。

たたら炉の北九州での検出は、幕末期（安政年間開始）に、国防対策の鉄増産として操業されたものである。昭和三十八年発掘調査の真名子鉄山（八幡西区香月）、昭和六十二年発掘調査の金山たたら（若宮町犬鳴）である。両者とも石見国津和野領より招へいした藤川利右衛門という村下（技師長）により操業された。

両たたら場ともに原料砂鉄は、福間、津屋崎、渡り等の浜砂鉄である。

たたら製鉄法には、和銑を作る銑押（ずんおし）しと、和鋼を作る鍛押（けらおし）しの二法がある。当地の製造法は、後者の鍛押し法で、砂鉄は酸性砂鉄（チタン分の少ない砂鉄）が用いられた。

このたたらで製造された鍛は、銃剣らの素材となったと考えられる。福岡藩の反射炉と、これらた



①潤　崎：製錬滓ウルボスピネル（$2FeO.TiO_2$）、イルミナイト（$FeO.TiO_2$）
　　５世紀後半、日本最古
②真名子：製錬滓マグネタイト（Fe_3O_4）＋フェアライト（$2FeO.SiO_2$）
　　近世たたら
③上清水：鍛冶滓ヴスタイト（FeO）＋フェアライト（$2FeO.SiO_2$）
　　６世紀末、古墳供献北九州初例
④本　城：鍛冶滓ヴスタイト（FeO）＋フェアライト（$2FeO.SiO_2$）
　　中世、山城出土鉄滓

写真3　鉄滓の鉱物組成（×100）